様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２８８３

研究課題名（和文）自己学習力を育成する文字教育モデルの構築―学習者の文字学習方略を中心に―

研究課題名（英文）Perspectives for Developing a Character Literacy Education Model Aimed at Fostering Self-directed Learning: Emphasizing Learners' Character Learning Strategies

研究代表者
長岡　由記（Nagaoka, Yuki）

滋賀大学・教育学系・准教授

研究者番号：９０６１５９１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、（１）近年の文字教育研究の動向についての調査、（２）文字教育の目的と学習内容の検討、（３）漢字教育およびローマ字教育の現状の課題の導出、（４）国語科教育における日本語表記の学習対象と指導の拠り所の検討、（５）自己学習力を育成するための文字教育モデルを構築するための観点の導出を行った。
これらの検討を通して、文字教育の目的と学習内容に基づいた文字教育の構造と、学習者がどのような学習方略を適用して文字を読み書きする主体になっていくのかという観点（特に、学習の目的と環境、学習者の特性や習得レベルに応じた方略の適用）を軸として文字教育モデルを構築するという方向性を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
仮名文字、漢字、ローマ字など文字の種類ごとにその指導法について明らかにしていく文字教育研究の蓄積はあるが、文字の種類の枠組みを超えて学習者の自己学習力育成の視点から文字教育モデルを構築しようとする研究の蓄積は少ないため、それに関する基礎的な研究を行ったことが本研究の意義である。また、文字教育の目的と学習内容を把握することと関連して、ローマ字教育の目的の変遷や、現在の学校現場における学習内容の実際について調査に基づいて明らかにしたことは、今後ローマ字教育の在り方について検討する際の基礎的資料として活用できると考える。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the following five points:1) Recent trends in research into character literacy education,2) The goals and curriculum of character literacy education,3) Current challenges into kanji education and romaji instruction,4) The topics in learning Japanese script and the guidelines for teaching it,5) Perspectives for developing a character literacy education model focused on fostering self-directed learning.
Through these considerations, I have suggested a framework for developing a character literacy education model based on the following two points:1) The goals and curriculum of character literacy education,2) Character learning strategies used by students in the process of reading and writing.

研究分野：国語教育学

キーワード：国語科教育　文字教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）国語科教育における文字学習は、学年が上がるほど学習者の自主学習や家庭学習に任せていく傾向にあることが指摘されている（棚橋（1999）p.30）。文字指導に充てる時間が十分に確保できないことや、そもそも文字は生涯にわたって学び続ける必要があることからも、学習者が文字を自主的に学んでいく力を育成することは重要である。しかし、この自己学習力育成の必要性についてはこれまでにも指摘されているものの、どのようにしてその能力を育成するのかという視点から文字教育の在り方を検討する研究は不足している。

（２）文字の自己学習力を育成するためには、日本語表記（文字）の特質や機能に応じた学び方（文字の学習方略）について検討する必要がある。現在の国語科教育では、多くの場合、小学校の入門期にまず平仮名を学習し、次に漢字と片仮名をほぼ同じ時期に学習し始め、その後は漢字を継続的に学びながら３年次にローマ字を学習するといった順で文字学習が行われている。しかし、平仮名の学習で得た知識や技能が、どのように片仮名や漢字、ローマ字の習得に繋がっているのかといった学びの連続性の視点が不足している。学びの連続性を意識した上で、それぞれの文字の機能や特質に応じた学習方略の獲得を促す指導内容・方法を開拓する必要がある。

（３）日本語教育や特別支援教育分野の研究では、学習者の認知特性や発達、母語の言語特性、学習の目的等に応じた学習方略についての研究が進められている。これらの知見を踏まえて文字の学習方略について検討するとともに、デジタルツールの活用など学習スタイルに応じた学習方略についても検討すべきである。

２．研究の目的

以上の課題意識に基づき、本研究では、文字学習の系統性を踏まえた上で文字の特質や機能、学習者の実態等に基づいて文字の学習方略の検討を行い、学習者の自己学習力を育成するための文字教育の在り方について検討することを目的とする。

３．研究の方法

まず、近年の文字教育に関する先行研究を調査し、国語科教育における文字教育の研究の動向をまとめる。次に、現在の文字教育の内容とその実際について、実態調査を含めて確認する。特に、ローマ字学習については多くの課題が指摘されていることから、教員を対象とした調査を行い、それらの結果も踏まえながら現在の文字教育の意義と課題を明らかにする。また、文字教育の内容を明確にするために、日本語表記指導の拠り所を確認し、学習対象文字についても整理・検討を行う。

これらの文字教育の現状を踏まえた上で、文字の特質や機能に応じた文字学習方略と、学習者のオリジナルの文字学習方略について、関連する先行研究をもとに検討を行い、学習者の自己学習能力を育成するための文字教育モデルを構築するための要点を導出する。

４．研究成果

（１）国語科教育における文字教育では、主に平仮名、片仮名、漢字、ローマ字に関する教育を行っている。本研究では、まず近年の仮名文字・ローマ字・表記の学習指導に関する先行研究を調査し、どのような観点から研究が進められているのかについて検討を行った。その結果、平仮名の学習指導に関しては、文字の習得状況や読み書き困難の要因、またそれらを踏まえた学習指導などについての研究が進められていることが見えてきた。習得の要因についての研究も行われており、社会文化的要因の影響や文字特性の影響、幼児のかな識字能力の認知的規定因などの観点から研究が行われている。また、「評価法」や幼小接続に関する研究も進められている。それに対し、片仮名の学習指導に関する先行研究はかなり少なく、研究の蓄積がみられないという課題があることが明らかとなった。

ローマ字学習については、これまで日本語の音韻構造や文法の理解、社会的に使用されているローマ字の読み書き能力の育成に加えて、情報機器のローマ字入力に資する学習としての役割があることが指摘されているが、現在のローマ字学習の目的と学習内容については、検討すべき課題が山積していることが明らかとなった。英語教育や特別支援教育、情報教育においてはローマ字学習の課題の指摘や、国語科のローマ字学習との連携の在り方についての検討が進められているが、国語教育研究では、ローマ字教育に関する研究が不足しているという課題があることも分かった。これらの先行研究についての検討結果は、長岡（2022b）の論考にまとめた。

（２）先行研究の検討を通して、現在の国語科における文字教育の目的と学習内容、現状の課題について整理する必要性があると判断したため、次に漢字及びローマ字学習の目的、学習指導の内容を整理した上で、現状の課題について検討を行った。

漢字の学習指導は、①読み書きできる漢字の習得力を増すこと（読字力、書字力）、②漢字を使いこなす運用力を身に付けること、③漢字の自己学習力（習得能力、学習能力など）を身に付

けることを目的として指導が行われている。ただし、この３点目の漢字の自己学習力を育成するという視点が不足しているという課題がある。特に、漢字学習を通して得た漢字の見方や学び方を学習者が自ら漢字を学ぶ方法に組み込めるようにするという視点、発達過程や個の状況に応じて、柔軟に漢字の学習方法を選択できるようにするという視点が不足していると考える。このことと関連して、丸山・木村（2002）では、「漢字を書いて覚えるという方略が他の方略に比べて、比較的よく用いられる一方で、部首に注意して漢字を覚えるということはほとんど行われていない」(p.59）と指摘されている。国語科の漢字学習では、ドリル学習に代表される繰り返し学習だけでなく、漢字の意味や組み立てに着目する学習、間違えやすい漢字に着目したり、同音異義語の使い分けを辞書で調べたりするといった多くの観点から学習を行っている。これらの主に取り立て指導で行っている漢字学習のポイントを自主学習に組み込んでいくことが重要である。

発達過程や個に応じた柔軟な学習指導法の選択については、例えば、誤答傾向に応じて学習方法を選択するという方法がある。また、個に応じた指導については、主に特別支援教育研究での研究成果にも学びながら、個々の学習者の認知処理能力に応じた独自の覚え方を見つける指導を取り入れることも可能である。また、漢字学習の方法だけでなく、関・土岐ら（2011）で指摘されているように、学習者にとっての漢字学習の目的と学びの環境、学習者の特性、習得レベルによって学習法を選択していくという視点も重要である。これらの漢字の学習指導の目的と課題については、長岡（2021）にまとめて発表した。

（３）次に、現在の文字教育の内容とその実際について実態調査を含めて確認した。特に、ローマ字学習については多くの課題が指摘されていることから、まずは現在の小学校国語科におけるローマ字学習の意義と課題について検討を行った。

『小学校学習指導要領』（平成 29 年告示）には、「第３学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されているものを読み、ローマ字で書くこと」（文部科学省（2018）p.78）と記されており、それに基づいて国語科教育ではローマ字指導が行われている。なお、「日常使われている簡単な単語」については、「地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のことである」（文部科学省（2018）p.79）と定義されている。この「児童が日常目にする簡単な単語」には複数のつづり方があるため、令和２年度版の小学校国語科教科書には、ローマ字指導の拠り所となっている「ローマ字のつづり方」（昭和 29 年内閣告示）に示されていない表記も掲載されている。例えば、身の回りで目にするローマ字表記の一例として、「Jimbohara」（神保原＊じんぼはら）、「Shimmachi」（新町＊しんまち）のように b/m/p の前の撥音を「m」で記すいわゆるヘボン式のつづり方で記された案内板等も掲載されている。一方で、現行の小学校３年生の教科書に採録されている「ローマ字表」には、「ローマ字のつづり方」の第２表に示されているヘボン式の「ぢ」のつづり方[ji]（＊ぢゃ・ぢゅ・ぢょ―ja・ju・jo を含む）は掲載されていない。ただし、「Tokuji」（徳地＊とくぢ）と書かれた案内板が掲載されている教科書もある。

このように、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編』（文部科学省）には、「ローマ字の表記に当たっては、「ローマ字のつづり方」(昭和 29 年内閣告示)を踏まえることとなる。」（p.79）と示されているが、「日常使われている簡単な単語」の定義に従うと、その「ローマ字のつづり方」の枠組みを超えた表記も一部学習対象となっていること、また「ローマ字のつづり方」に示されている表記が全て学習対象として取り上げられているわけではないことが明らかとなった。

このような混乱は、指導上の混乱にもむすびついていることが予想されるため、次に小学校教員を対象としたアンケート調査を実施した。この調査では、①指導者は、ローマ字学習の目的をどのように捉えているのか、②ローマ字入力をどの時間に指導しているのか、③授業で実際に取り上げられているローマ字学習（指導）の内容、④国語科授業で指導しているローマ字のつづり方と日常生活におけるつづり方、⑤ローマ字学習（指導）の困難点について調べた。その結果、訓令式とヘボン式の区別において混乱がみられること、また指導にあたって多くの課題があることが分かった。大まかに分類すると、次の５点の課題があることが明らかとなった。

１．学習内容は多いが、与えられている時数は少ない。
２．複数のつづり方があるが、学習における扱い方が難しい。
　＊外国語活動・外国語（英語）科との違い
　＊身の回りにあるローマ字表記は、「ローマ字のつづり方」に基づいていない表記法を含む場合がある。
３．ローマ字入力の方法の理解については、国語科が大きな役割を担っている。（ただし、時数は少ない。）
４．『小学校学習指導要領』（平成 29 年版）では、ローマ字による「語」の読み書きを学習対象として設定しているが、ローマ字入力は実用の側面から「文」（または文章）も入力することがあり、それらも学習対象にする必要がある。（※一文の入力を学習課題として設定している教科書教材もある。）
５．実生活において、日本語をローマ字（特に訓令式）で書く機会が少ない。（定着の難しさ）

同様の調査が文化庁国語課（2023）でも行われ、複数のつづり方を同時期に教えることによる

混乱や指導時数の少なさ、また日本語をローマ字でつづる方法を教える必要性については、多くの教員にとっての課題であることが明らかとなった。

これらの現状を踏まえた上で、次に国語科教育におけるローマ字学習の位置付けと学習内容について、昭和 22 年から現在に至る変遷を踏まえながら整理・検討を行った。その結果、「ローマ字教育」は、児童・生徒に語意識（単語と文の構造意識）を与えること（文法の理解、読解力・表現力、国語力の育成を含む)、日本語の音を音素文字（ローマ字）で書き表すことにより音素間に変化のある日本語の変化を理解できるようにしたり正しい発音の指導を行ったりすること、国語・国字問題について考える力を身に付けることといった効果を期待して位置付けられてきたことが明らかとなった。しかし、現在の小学校国語科におけるローマ字学習では、日本語の文の構造や文法知識などを身に付けたり国語・国字問題について考えたりするといった意義はしだいに失われていき、①日本語の音が子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解すること、②日常生活場面で多く用いられている表記法を理解すること、③ローマ字入力の主に３点において意義のある学習として位置づけられていることが見えてきた。ローマ字学習の課題については、①訓令式を中心に指導することの意義が明確でないこと、②複数のローマ字表記の扱い、③国語科と外国語（英語）科との連携の在り方、④国語科におけるローマ字入力学習の範囲の４点において課題があることを指摘した。これらのローマ字学習（指導）に関する一連の研究成果については、長岡（2022a, 2022b, 2022d）と長岡（2023a, 2023c）にまとめて報告した。

（４）ローマ字学習が「ローマ字のつづり方」（昭和 29 年，内閣告示）を拠り所としているが、日常生活においてはそれ以外の表記も目にしたり書いたりするといったように、いわゆる「規範」的な表記法と日常生活における書き方には違いが生じる場合がある。その点について明らかにするために、日本語表記の拠り所の確認と学習対象文字について検討を行った。その結果については、長岡（2023b，2024）にまとめた。

（５）以上の文字教育の現状と課題、目的と学習内容についての検討結果を踏まえた上で、学習者の自己学習力を育成するための文字教育モデル構築のための要点について検討を行った。

自己学習力を育成するためには、学習者がどのように自己調整を行いながら学習を進めているのかという視点を取り入れることが重要である。そのため、国語科の文字教育の構造だけでなく「学習者が、メタ認知、動機付け、行動において自分自身の学習過程に能動的に関与していること」（伊藤崇達（2012）p. 31）という「自己調整」の視点も取り入れて考えてモデルを構築する必要がある。漢字学習の先行研究で取り上げた関・土岐ら（2011）が指摘しているように、学習者にとっての漢字学習の目的と学びの環境、学習者の特性、習得レベルによって学習法を選択するという視点を取り入れるということともつながるものである。なお、学習環境については、ICT 機器を活用した文字学習についても考慮する必要がある。この点に関連して、「手書き」と「タイピング」を比較して、書くことにおける「手書き」のメリットとデメリットについて考察した結果を、長岡（2022c）にまとめて発表した。

国語科における文字教育では、大まかに分類すると①言語生活における文字の運用（文字の読み方・書き方、意味、姿勢や動き)、②文字体系（＊語彙体系を含む場合がある）（文字の定義、文字の構造、書字（表記）法)、③文字文化の伝承と創造、④文字の機能に関する学習（指導）を行っているが、これらの学習内容のどこにアプローチする方略なのかという視点から文字教育モデルを構築していくことも重要である。

さらに、学習者がどのように文字を読み書きする主体となっていくのかという視点を取り入れる必要がある。これは、自己調整学習で指摘されている「社会的環境」とも関連する考え方であるが、文字を読み書きする場において、他者にどのようなサポートを求め、さらにそれをいかに受容しているのかについては個々の学習者の状況によって異なるため（長岡 2014)、この他者との関わり方を含めて学習者がどのように文字の主体的な読み手・書き手になっていくのかという視点からも文字教育モデルを構築していくことが重要である。

研究構想段階で予定していた学習者のオリジナル方略についての調査と検討については今回実施することができなかったため、今後はそれらの実態調査に基づいて、自己学習力を育成するための文字学習方略について継続的に検討を行っていく予定である。

【引用参考文献】

・伊藤崇達（2012)「第２章　自己調整学習方略とメタ認知」『自己調整学習―理論と実践の新たな展開へ―』自己調整学習研究会編，北大路書房，31-53
・関正昭・土岐哲・平高史也編（2011)『日本語教育叢書「つくる」漢字教材を作る』スリーエーネットワーク
・柵橋尚子（1999)「主体的な言葉の学び手の育成に向けて―語彙指導としての漢字教育を考える―」月刊国語教育研究，329，28－33
・長岡由記（2014)「幼稚園年長児の「書字」方略の検討―外界への働きかけとその受容の仕方に着目して―」『国語科教育』76，全国大学国語教育学会，31-38
・長岡由記（2019)「漢字の学習方略の獲得を促す指導内容の検討―田中久直氏の漢字教育論を中心に―」『国語科教育』86，全国大学国語教育学会，35-43
・長岡由記（2021)「漢字の学習指導に関する課題」第 141 回全国大学国語教育学会公開講座「漢

字と文法の学習について改めて考える①－今、漢字教育について問うべきことを探る」発表資料
・長岡由記（2022a）「小学校国語科におけるローマ字学習の意義と課題についての検討」『国語科教育』91，全国大学国語教育学会，18-26
・長岡由記（2022b）「２ 仮名文字・ローマ字・表記の学習指導に関する研究の成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』渓水社，301-308
・長岡由記（2022c）「「手書き」のメリット・デメリットから「書くこと」を問い直す」『教育科学国語教育』875，明治図書，70-73
・長岡由記（2022d）「小学校国語科におけるローマ字学習について」第 55 回文化審議会国語分科会国語課題小委員会，配布資料３，1-42
・長岡由記（2023a）「小学校国語科における日本語表記の学習について―ローマ字学習の目的・内容を中心に―」令和５年度国語問題研究協議会，発表資料
・長岡由記（2023b）「文字の教育について考える―日本語表記の学習対象と日常生活における書き方」コモンズ・ランガージュ，発表資料
・長岡由記（2023c）「ローマ字の学習内容に関する検討」第 145 回全国大学国語教育学会（信州大会），発表資料
・長岡由記（2024）「文字・表記の学習対象に関する検討-「規範」と「実用」の観点から-」『ランガージュ』２，42-50
・丸山真名美・木村純（2002）「高校生の漢字の書き取りにおける誤答パターンと学習方略の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　心理発達科学』49，55-64
・文化庁国語課（2023）「ローマ字に関する意識調査の結果について」令和５年度国語問題研究協議会，文化庁，1-39
・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編』東洋館出版社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 長岡由記	４．巻 875
２．論文標題 「手書き」のメリット・デメリットから「書くこと」を問い直す	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育科学国語教育	６．最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡由記	４．巻 91
２．論文標題 小学校国語科におけるローマ字学習の意義と課題についての検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国語科教育	６．最初と最後の頁 18-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡由記	４．巻 2
２．論文標題 文字・表記の学習対象に関する検討―「規範」と「実用」の観点から―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ランガージュ	６．最初と最後の頁 42-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 長岡由記
２．発表標題 小学校国語科におけるローマ字学習について
３．学会等名 文化審議会国語分科会　国語課題小委員会（第55回）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 長岡由記
２．発表標題 【公開講座】漢字と文法の学習について改めて考える①今、漢字教育について問うべきことを探る―漢字の学習指導に関する課題
３．学会等名 第141回全国大学国語教育学会（秋季大会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 長岡由記
２．発表標題 小学校国語科における日本語表記の学習について―ローマ字学習の目的・内容を中心に
３．学会等名 令和５年度国語問題研究協議会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 長岡由記
２．発表標題 文字の教育について考える―日本語表記の学習対象と日常生活における書き方
３．学会等名 コモンズ・ランガージュ
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 長岡由記（共著）	４．発行年 2022年
２．出版社 渓水社	５．総ページ数 581
３．書名 「Ⅴ日本語基礎事項の学習指導に関する研究の成果と展望－２仮名文字・ローマ字・表記の学習指導に関する研究の成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関